

井谷善恵先生訪問記

谷 孝夫

本日は、輸出工芸史および異文化交流史が御専門の、多摩大学グローバルスタディーズ学部講師や東京芸術大学等の非常勤講師なども勤められておられる井谷善恵先生の御自宅を訪問しました（図1）。

井谷先生は、3人のお子さんの育児が一段落した後、関西学院大学大学院文学研究科美学専攻の修士課程に進学され、さらにロンドン大学大学院を経てオックスフォード大学大学院にて、2006年、博士号D. Phil (Oxon) 取得というユニークな御経歴をお持ちの方です。御専門の輸出陶磁器の魅力に加え、主婦から再び学業を志されたきっかけ等、色々な話を伺いました。

本日は大変お忙しい中、どうもありがとうございます。まず、御専門について話を聞かせて下さい。

専門は、近代における輸出陶磁器を中心とした輸出工芸史、および異文化交流史です。大学院では幕末から明治初期の、瀬戸や美濃の土を生地にし、名古屋で絵付けして輸出された、ノリタケに代表される近代輸出陶磁器を中心とした調査・研究活動を行いました（図2）。横浜港から主にアメリカ向けに輸出された近代輸出陶磁器を研究対象としてきました。近年は輸出陶磁器に限らず漆器なども含めた近代輸出工芸史にその対象を広げています。

そもそも、主婦をされながらこういうテーマに興味を持たれたきっかけは？

大学院入学前にノリタケの森で行われているチャイナペインティング講座に3年間通っていましたが、しかしながら、修了後、自分で作品を製作することよりも、その歴史を調べて書くということに強く興味を持ちました。皆さんもゴルフやお酒等、“これだけはやめられない”という趣味をお持ちかと思いますが、私の場合、それが“書く”ということであったようにおもいます。そして、長男が中学校に進学し、育児が一段落したことをきっかけに、関西学院大学大学院への社会人入学を考え始めました。



図1 井谷先生御自宅にて（左：筆者、右：井谷先生）

当時、そういうケースは珍しかったのでは？

当時の関西学院大学院の社会人入学は、指導教官が受入を入試前に了解しないと社会人は受験ができなかったのですが、吉村元雄教授（美術工芸史）が受け入れを了解して下さり受験が可能となりました。

その後、渡英された経緯は？

関学での修士課程終了後、そのまま博士課程に進んだのですが、そのころ夫が転勤でロンドン赴任となり、家族全員でいくことを決め、関学での博士課程を休学して渡英しました。そこでイギリスでも研究を続けたいと願い、結局自宅からのアクセスもいいロンドン大学SOASの修士課程（日本美術史）に入学しました（図3）。仏像や絵画なども含む日本美術史全般の勉強は非常に大変だったのですが、なんとか最優で修士号（M. A. Distinction）を取得しました。その後、日本の美術工芸史の研究を行う上でより環境のいいオックスフォード大学博士課程に進学しました。

修士課程も大変であったとお話でしたが、学位取得はさらに大変だったのではないかと思います。そこまで輸出工芸史に惹かれた理由は？

私は、父親の仕事の関係で、中学・高校時代をアフリカのナイジェリアで過ごしました。そして、十代から現地で色々な面での文化の違いや異文化との交流といったことを経験し、異文化とはなにか、人は異文化に出会った時にどうするのかを考える機会に恵まれました。それが自分のバックボーンとなった気がします。輸出工芸史について言えば、当時、日本人が作った輸出陶磁器が海外でどう受け入れられたのか、また



図2 御研究対象の輸出磁器（左）女の子像壺，オールドノリタケ，森村組製，裏印メープルリーフ，1891～1903年，（右）薔薇模様金彩ジャグ，オールドノリタケ，森村組製，裏印メープルリーフ，1891～1903年，ノリタケ社が所蔵する画帖のデザインとほぼ一致する。蓋は失われている。



図3 ロンドン大学時代，研究を始めた頃の井谷先生（オールドノリタケの調査でアメリカのシアトルのコレクターを訪問された際の1枚）

受け入れられるようにするため日本人はどう工夫してきたか等について非常に興味を持ちました。そして、調査を進めていくと、江戸時代各藩に買い上げてもらった陶磁器などの工芸にはそれまでの伝統に培われた技術や卓越した職人技があり、明治維新以降そういう職人たちが作った工芸品が外貨を稼いで近代日本の富国強兵・殖産興業の一端を担っていたこと等、色々なことがわかり、ますます興味深く思うようになった次第です。

また、社会人という立場での研究を考えると、やはり家族の応援がなにより支えになったと思います。経済的なことが大きいですが、精神的にも落ち着いて研究を続けられたのが本当にありがたかったです。

色々貴重な御体験をお持ちの先生ですが、大学の講義ではどのようなことを学生に伝えようと思われていますか？

多摩大学では、美術史全般の講義を英語で行っています。ただ、美術史の専門家を育てるというわけではないので、講義では“自分のセンスを磨こう”、“そのためにいいもの(本物)を見よう”、ということをお学生には伝えています。東京芸大では日本の工芸が海外でどう受け入れられてきたかを教えています。

先生から見て今の学生はどうですか？

基本的にセンスはいいと思うのですが、プレゼンテーション等の場で、多くの学生が人に届く声を出せていないというか、自分の考えを他人に伝える努力がまだまだ足りないように思います。例えば、学生に限らず我々でもその日の服装ひとつをとっても、何らかの意思で自分なりにコーディネートしているわけです。そういう風に自分の意思を人に伝えられるようになって欲しいと思います。

これまで多くの本を執筆され、“書く”ということでお自身のお考えを人に伝える努力をされてきた先生ならではの視点ですね。ところで、最近、また本を出版されたと伺いましたが、

はい、今年10月に『美術工芸の明日を担う20人』という本を出版しました*1(図4)。これは、一年間かけて日本の工芸界の未来を担う各分野の第一人者20人を取材し、私の工芸論「うちからみた日本工芸」とからみた日本工芸」と合わせて一冊の本にまとめたものです。陶芸だけでなく漆芸、金工、木竹工、染織、ガラス、人形といった幅広い美術工芸の魅力、またそれぞれの世界で活躍する工芸家の先生方の素晴らしい生き方を味わっていただけけるのではないかと思います。

話は変わりますが、日本ポーセリン協会の会長という肩書をお持ちですが、どのような活動をされているのでしょうか？

日本ポーセリン協会は、協会といっても日本セラミックス協会のような大きな組織ではなく、オールドノリタケを



図4 最近出版された“美術工芸の明日を担う20人”

中心とした主に明治期以降の近代陶磁器を愛好する同好の人たちの集まりです。年1回の総会では、近代輸出陶磁器を愛する会員が集まって、それらを集めたり、知識を深めたり、同じ趣味を持つ者とのふれあい楽しみ、共有しています。

最後に読者にメッセージをお願い致します。

先程紹介した本の中にも書いたことなのですが、今こういった美術工芸の伝統を守ることが難しくなっています。工芸には、金槌(金工)、カンナ(木工)といった道具、土(陶芸)、竹(竹芸)といった素材が重要ですが、今優れた道具や素材が手に入りにくくなっているのです。それに対して我々ができることは、生活の場面でこういった工芸品を少しでも多くの人たちが使うことです。我々の生活に広く浸透していけば、後継者の問題、道具や素材の問題もいい方向に向かっていくと思います。日本ポーセリン協会の活動も“陶磁器の生活への浸透”という目線で捉えて頂ければ御理解頂けるのではないかと思います。是非、読者の皆様とともに、工芸品により一層目を向け、次世代にその技術や魅力を伝えていければと願っています。

本日はどうもありがとうございました。

編集後記 雑談時の大らかな表情と工芸を語られる時の真剣な眼差しのコントラストが印象的でした。これまで全く知らなかった工芸史という世界の一端に触れたことも素晴らしい経験でしたが、“主婦時代の興味を学問として発展させ、さらに執筆・教育活動を通じて次の世代に発信”という、信念ある生き方に深く感銘を受けました。筆者に芸術センスは皆無ながら、工芸品に多少興味を持つとういう気持ちになりました。

注

*1 古美術・工芸の月刊誌『目の眼』(里文出版)の創刊35周年を記念して出版

■筆者紹介 谷 孝夫

(株)豊田中央研究所
[連絡先] E-mail: tanitaka@mosk.tytlabs.co.jp

[投稿歓迎-編集委員会では「ほっと」spring欄への会員からの投稿を歓迎します。編集事務局までご一報ください。]